

## 伝寂蓮筆源氏物語切「花散里」の性格

池 尾 和 也

### 1、架蔵、伝寂蓮筆六半切（源氏物語・花散里）について

架蔵切は、未装の断簡（図版参照）で、極札（楮紙、一二・二×一・九cm）には、  
寂蓮法師きとりて〔見室（朱印）〕

とある。木村見室（生没年未詳）の極めで、見室は古筆本家六代了音（延宝二1674〜享保十1725年六月二十二日、五十二歳）の門人なので、江戸中期の極めとなる（極札裏には判読不能の墨痕が認められる）。本紙は楮打紙、寸法は一七・九×九・七（字高一四・八〜一六・五）cmで、三〜六行目一〜二字目の行間には擦消痕が裏映りか判別不能の薄い墨痕が認められる。切裏には、「六十五」とあるほか、極札裏と同じく判読不能の墨痕が認められる。切の上下に上四・六cm、下三・二cmの縦幅（横は本紙と同寸）で金銀箔散らしの斐紙を継紙し、これを含めた全体を幅〇・二cm

の利休茶地の金襴（紋様不明）で覆輪する。

本切のツレは、『古筆学大成』第二十三卷<sup>(1)</sup>所載の「伝寂蓮筆源氏物語切」（図117・東京国立博物館蔵「十三号手鑑」所収）以下、「東博切」と略称）の二葉（明石）が確認されるのみであり、同「解説」に依ると、料紙は「鳥の子」、一八・四×一六・三cm、一面十行書（極札等未調査）。ツレを参考にすると、元は六半形としてはかなり縦長で特殊な判型の冊子本（こうした特殊な判型は装飾料紙を用いた調度本などに見られる）であったと推定され、本切は、下部を少しと横を大幅に（四・五行分）切り取られているものと思われる。「解説」には「古筆において寂蓮と伝称する一群の筆跡よりは、やや時代が下の十三世紀半ばすぎの書写」とあるが、これは東博切を「河内本系統」とするところから、河内本の成立時期に合わせた書写年代を想定したものと考えられる。書風的には鎌倉中期まで下るものとは見えにくく、「十三世紀前半の書写<sup>(2)</sup>」とされる伝西行筆林葉集切に近い）、伝称筆者寂蓮の生存期を含む鎌倉初前期頃の書写と見ることも可能かと思われるが、これについてはその書写内容を検討した上で判断したい。

本紙を翻刻しておく、

きとりて御せうそきこゆわかやかなる

けはひとんしておほめくなるへし

ほとゝきすことゝふこゑはそれ

なれとあなおほつかなさみたれの

そらことさらにたとひとみればよしく

うゑしかきねもとていつるを人しれす

寂蓮法師 きてりて



まことや ぬきとて まことぬきや  
けりて ぬきとて まことぬきや  
にほやかとて まことぬきや  
あまのこゝろに ほろりたるまことぬきの  
あまのこゝろに ほろりたるまことぬきの  
あまのこゝろに ほろりたるまことぬきの

となる。書写内容は、『源氏物語』「花散里」(『源氏物語別本集成』第三卷・『源氏物語別本集成統』第三卷(以下、「別本集成」)「別本集成統」と略記)文節番号110162～110177(以下、算用数字のみを記す(冒頭の11は巻別番号))、『源氏物語大成』第二冊(以下、「大成」)三八八頁7～10行目(以下、漢数字・算用数字のみを記す)で、源氏は、亡き桐壺院の女御であった麗景殿の妹の三の君(花散里)を忘れられず、五月雨の晴れ間に三の君が同居する女御の邸を訪問しようとして中川の辺りを通り掛かると、以前関係のあった女の家があることに気づき、折から郭公が鳴き渡って昔を思い出させるので、従者の惟光に案内を請わせたところ、女は長い途絶えを怨んで源氏を迎え入れなかつたという下りで、須磨への流謫が迫る中での、色好みの光源氏らしいエピソードを伝える場面である。<sup>(5)</sup>

次に、本切の本文系統について見ておきたい。「花散里」は定家本原本が伝存するので、これを底本として文節単位ですべての校合本を掲出し、底本と本切に異なるある箇所には「◎」、本切と底本間に異なるないが校合諸本中に一本でも異なるものは「○」、傍注や仮名遣い・反復記号・漢字仮名の違いのみの異同は「△」を付して示す。「別本集成」(「別本集成統」)『河内本源氏物語校異集成』(以下、「河内本集成」)所収の諸本及び、「大成」校合本のうち上記書に未所収の横山本(横)は「大成」に依り、東海大学図書館桃園文庫蔵明融本(明)、宮内庁書陵部蔵三条西家本(証)、飯島本(飯)、米国議会図書館蔵本(米)、宮内庁書陵部蔵(554・14)正徹本(徹)、国文学研究資料館蔵(サ4・75・11)正徹本(研)、大正大学図書館蔵本(正)を加えて校異を示すこととする。<sup>(14)</sup>私に付したものを除き、諸本の略号は概ね「別本集成」「別本集成統」「河内本集成」「大成」に倣うが、「大成」「河内本集成」が中京大学図書館蔵大島本に「大」を充てるため、古代学協会蔵大島本は「古」とし、日本大学蔵三条西家本(大成「三二」別本集成統「日」)は「日」、国立歴史民俗博物館蔵高松宮本(大成・河内本集成「宮」、別本集成統「高」)は「高」、尊経閣文庫蔵定家本は「定」、架蔵切は「寂」とした。異同の種別を示す記号(◎○△)の上にある丸付数字(①～⑥)は、本切

の行数を示し、三桁の算用数字は「別本集成」の文節番号を示す（「花散里」は総文節数424なので、千の位「0」は省略した）。校異符号は原則として「別本集成」にしたがうが、可能なかぎり振り仮名<sup>(15)</sup>右傍書のかたちで処理し、処理しきれない情報は校異略号下に「↓」を付して補足した。また、「別本集成統」に倣い、底本と異なるない諸本（底本「定」を含む）を底本本文下に列記した。横山本及び「河内本集成」所収の校異本文については、仮名遣い・漢字仮名の違いが忠実に反映されていないので、表記が確定できるもの以外には「」を付した。

① 162 ○けしき（定古明陽麦阿尾為鶴日穂高天〔七平大鳳兼岩横〕飯米研）・けしき（前）・氣しき（証国肖伏保徹正）

―けしきか（御）・（けし）き（寂）

① 163 △とりて（定古明証陽御麦阿尾国肖為鶴日伏穂保前高天〔七平大鳳兼岩横〕飯米徹研正）↓以下、「―」（対照異

同ナシ）」と略記

① 164 ○御せうそこ（定古寂明証陽麦阿尾肖鶴日穂保前天〔七平大鳳兼岩〕米徹研正）・御せうそく（御国為飯）・御消息（伏横）―御せうそこと（高）

① 165 ○きこゆ（定古寂明証陽御国肖為鶴日伏穂保〔横〕米徹研）・聞ゆ（前正）―いふ（麦阿尾高天〔七平大鳳兼岩飯〕↓「河内本集成」は「といふ宮※」とするが、文節の関係上「御せうそこと」として異同を揭示

① 166 1△わかやかなる―（対照異同ナシ）

② 167 ◎けしきともして（定古明証国為日伏前〔横〕米）・氣しきともして（鶴保）―けはひとんして（寂）・けはひともして（穂）・けわいともして（陽御）・けわいともあまたして（麦）・けはひとあまたして（阿尾高天〔七平大鳳兼岩飯〕）・けしきともあまたして（肖徹研正）

- ② 168 ○おほめくなるへし (定古寂明証陽御麦尾国肖為鶴日伏穂保前高天〔七平鳳兼岩横〕飯米徹研正) — ナシ (阿)・  
おほめかくなるへし (大)
- ③ 169 △ほとゝきす (定古寂陽阿尾国為日穂保高〔七平大鳳兼岩横〕飯米徹研正)・ほとゝきす (明)・ほとゝきす  
〔合点〕<sub>女</sub> (明)・ほとゝきす<sub>誰共ナシ</sub> (朱)
- ③ 170 (鶴)・郭公 (証御肖伏前天)・時鳥 (麦) — (対照異同ナシ)
- ③ 170 ○ことゝふ (定寂陽御麦阿尾伏穂高〔七平大鳳兼横〕飯)・こととふ (古国天米) — かつらふ (証肖鶴日保岩徹  
研正)・かつらふ (為)・かつらふ (前)・こととふ (明)
- ③ 171 ○こゑは (定古寂明陽御麦阿尾国肖鶴日伏保前高〔七平大鳳兼岩〕飯米徹正)・声は (証〔為穂天〕研) — こゑ  
も (横)
- ③ ④ 172 ○それなれと (定古寂陽御国為鶴日伏穂保前高〔七平鳳兼横〕飯研) — それなから (証麦阿天大米徹正)・  
それなからと (肖)・それなれと (明)・それなれと (岩)
- ④ 173 ④ 74 ○あなのおほつかない (対照異同ナシ)
- ④ 175 △さみたれの (定古寂明証陽御麦阿尾国肖日保前高〔七平大鳳兼岩横〕飯米徹正)・五月雨の (為鶴伏穂天研)  
— (対照異同ナシ)
- ⑤ 176 ○そら (定古寂明陽御麦阿尾国日伏保高〔七平大鳳兼岩横〕飯)・空 (証肖為鶴穂前天米徹研正) — (対照異同  
ナシ)
- ⑤ 177 ○ことさら (定古明〔横〕) — ことさらに (寂証陽御麦阿尾国肖鶴日伏穂保前高天〔七平大鳳兼岩〕飯米徹研  
正)・殊更に (為)
- ⑤ 178 ○たとると (定古明証陽御阿尾国肖為鶴日伏穂保前高天〔七平大鳳兼岩横〕飯米徹研正) — たひと (寂)・た

ると(麦)

⑤ 179 ○みれは(定古寂明証阿国肖為鶴日伏穂保前〔横〕徹)・見れは(御〔は〕〔判読〕) 麦米研正) — 見ゆれは(尾)・

みゆれは(高天〔七平大鳳兼岩〕飯)

⑤ 180 △よし(定古寂明証陽御麦阿国肖為鶴日伏穂保前高天〔七平大鳳兼岩横〕飯米徹正)・よしよし(尾)・

よし(米合惑) 研) — (対照異同ナシ)

⑥ 181 △うへし(定鶴飯)・うへし(古証麦阿尾国肖日伏保天〔七平大兼岩横〕米徹正)・うへし(寂陽御穂)・うへし(明)・植し(研)・うへし(為)↓「かこはねとよもきなまりき夏くれはうへしかきねもしけりあひけり(行間・右肩ニ記号アリ)」・うへし(前)↓「花ちりし庭の木のほも茂りあひてうへしかきねもみえこそわかね」(行間)・うへし(高)↓「かこはねとよもきのまかき夏くれはうへしかきねもしけりあひにけり」(行間、傍

|| 奥入、「花ちりし庭のこのほもしけりあひてうへしかきねもみこそわすれね」(行間、傍花||紫明) — (対

照異同ナシ)

⑥ 182 ○かきねもとて(定古寂明証陽御麦阿尾国肖日伏穂保前高天〔七平大鳳兼岩横〕米徹研正)・垣ねもとて(鶴)・

かきねもとて(為) — かきねもて(飯)

⑥ 183 △いつるを(定古寂明証陽御麦尾国肖日伏穂保前高天〔七平大鳳兼岩横〕飯徹研正)・出るを(阿為鶴米) —

(対照異同ナシ)

⑥ 184 ○人しれぬ(定古証陽麦阿尾国肖鶴日伏穂保前高天〔七平大鳳兼岩横〕飯米徹研正)・ひとしれぬ(御為)・人

しれぬ(明) — 人しれす(寂)

しれぬ(明) — 人しれす(寂)

しれぬ(明) — 人しれす(寂)

しれぬ(明) — 人しれす(寂)

「花散里」については、別本は「大成」に「御物本（東山御文庫蔵）」「陽明家本（陽明文庫本）」の二本が上げられるのみであり、両本とともに「別本集成」に用いられた阿里莫本・麦生本とともに河内本系統の本文を有するとされる。<sup>(16)</sup>「別本集成続」では別本に属するとされる鶴見大学図書館蔵本が加えられ、現在のところ三本の別本が知られることになる。<sup>(17)</sup>（別本に分類される古筆切資料は、現在のところ確認していない）。<sup>(18)</sup>

僅か六行分であるが、本切には河内本系統と定家本系統、<sup>(19)</sup>別本系統を区別するためのリトマス試験紙的な役割を果たす箇所がいくつか含まれているので、先ずこれについて見ておきたい。

① 165 ○きこゆーいふ（麦阿尾高天〔七平大鳳兼岩〕飯）

⑤ 179 ○みれはー見ゆれは（尾）・みゆれは（高天〔七平大鳳兼岩〕飯）

の二箇所は、河内本系統とそれ以外が対立するが、後者では河内本系統とされる阿里莫本（みれは）・麦生本（見れは）は外れている（前者の異同が河内本に一致する永青文庫蔵北村季吟筆本・同正親町三条公兄筆本・筑波大学図書館蔵〔貴・和・70・2〕本・島原図書館松平文庫本・鹿児島大学附属図書館玉里文庫〔天217・131〕本・立命館大学図書館西園寺文庫本といった諸本も同様であり、後者に関しては書写の古くない伝本では揺れが認められるようである）。<sup>(20)</sup> 寂蓮切は「きこゆ」「みれは」で双方とも定家本に一致し、河内本系統の本文である可能性は低いことがわかる。

② 167 ○けしきともして（定古明証国為日伏前〔横〕米）・気しきともして（鶴保）―けはひとんして（寂）・けはひ

ともして（穂）・けわいともして（陽御）・けわいともあまたして（麦）・けはひとあまたして（阿尾高天〔七平大鳳兼岩〕飯）・けしきともあまたして（肖徹研正）

この異同については、これを更に分割して見た方がわかり易い。

②② ○けしきとも（定古明証国肖為日伏前〔横〕米徹研正）・気しきとも（鶴保）―けわいとん（寂）・けわいとも（陽



御麦)・けはひとも(阿尾高天〔七平大鳳兼岩〕飯)

②〇して(定寂古明証陽御国為鶴穂保日伏前〔横〕米)―あまたして(麦阿尾肖高天〔七平大鳳兼岩〕飯徹研正)前者は「けしきとも」とする定家本系統と「けはひとも」とする河内本・別本系統が対立し、後者では、「して」とする定家本系統・別本系統と「あまたして」とする河内本系統に対立が認められるが、これらの異同は次の四種に整理することができる。

- (1)けしきとも＋して(定古明国為日伏前〔横〕米鶴保)
- (2)けしきとも＋あまたして(肖徹研正)
- (3)けはひとも＋して(寂陽御穂)
- (4)けはひとも＋あまたして(麦阿尾高天〔七平大鳳兼岩〕飯)

これを「けしき」―「けはひ」部分を重んじて整理すると、(1)(2)と(3)(4)の二グループに分かれ、「あまた」の有無を中心に見ると、(1)(3)と(2)(4)に分かれることとなるが、(1)は定家本系統、(4)は河内本系統であることは明らかであり、(3)は別本系統と考えられる諸本群を含むものである。問題は(2)で、例えば肖柏本は定家本系統に位置付けられるが、「花散里」は「大成」では採られていない(池田龜鑑氏のコメントが記された付箋には「河内本 少異アリ」という池田氏のコメントのほかに、黒ペンで「本帖の本文は、大体に於て湖月抄の本文に一致して居ります。」、鉛筆で「大河内本なり」という別人(斎藤秀雄(春名好重)氏か)の書入がある由である<sup>(21)</sup>)。「別本集成統」の異同を見るかぎりでは本文的には純粹な河内本とは言えず、おそらくは定家本系統との混交本文と考えられた結果であろうが、これらやはり定家本系統の伝本が河内本系統に接触し、混入したものと理解してよさそうである(したがって(2)は、(1)の下位分類の位置に置かれるべき伝本群となる<sup>(22)</sup>)。(2)の異同に関しては、対校範囲を少し拡げると、長野市旧真田文庫蔵

〔28・8・1〕本・永青文庫季吟本・永青文庫〔218・39〕本・筑波大学図書館蔵〔貴・和・70・2〕本・相愛大学図書館春曙文庫蔵〔913・36・M・春15〕本・同春曙文庫蔵〔913・36・M・春156〕本・同春曙文庫蔵〔春154〕本・愛媛大学図書館鈴鹿文庫蔵〔913・6・1・40〕本・国立国会図書館蔵〔特1000・貴・26／貴7・54・55〕本・宮内庁書陵部蔵〔510・19〕本・京都大学附属図書館蔵〔4・30・ケ・3貴〕本・早稲田大学図書館蔵〔02・04867・0051〕本・同伊地知鉄男文庫〔文庫20・00396〕本・慶安版本・『首書源氏物語』なども同様の本文を有しており、『湖月抄』のような異本注記型なども含めるとさらに増える。主要伝本では尚柏本・正徹本・大正大学本のみ異同として捉えられるが、中世末〜江戸期においては比較的広く流通していた本文であったことがわかる。

このケースに関しては、河内本系統の「あまた」は、少し前の行文「しん殿とおほしきやのにしのつまに人くゝゐたり」(定家本・傍線稿者)とあるのを受けた説明的な付加として理解されるが、「けしき」と「けはひ」の違いはど  
う理解すべきであろうか。現代語訳してしまえば両者とも「様子・気配」であるが、「けしき」はより視覚的な要素を  
含む語であり、「けはひ」は視覚以外の音や匂い、肌感覚などに重心を置く語であると理解される。この場合、源氏  
の命を受けた惟光は「さきくもきくしこゑなればこわつくりけしきとりて」(以前にも聞いたことのある声なので、  
咳払いをして相手の様子を窺って)から源氏の言づてをお伝えする。その様子を女房たちが聴いてざわめくのを「わ  
かやかなるけしきともして」(若々しい気配などして)と述べるので、惟光の目には直接若い女房たちの姿は映ってい  
ないようである。そうであれば、こゝは「けはひ」とある方が自然であるように感じられる。たゞし、これも先に「に  
しのつまに人くゝゐたり」とあることを重くみれば、既に視覚的に認知された事象となるので、「けしき」とあつても  
不都合ではない。寧ろ整合性がある表現であると見做すこともできる。この行文の前に「けしきとりて」とあるのも、  
こゝに「けしき」を選択するのに一役買っているようでもあるが、これは中川の女ひとりに向けた表現であり、「わか

やかなる」女房たちは視覚的な存在としては薄い。まさに背後の存在として「けはひともしておほめく」方が物語的な奥行を感じさせる。定家本の表現は一度既に視覚化されたものを再認識するという意味で論理的ではあるが、それ故に「けはひ」↓「けしき」の変化は想像できてしまう。逆に「けしき」を「けはひ」と書き換える必然性は見当たらない（敢えて想像すれば、先の「けしきとり」との重畳を回避するという意識による改変の可能性はあるにしても）。「両語とも『源氏物語』中にも多数の用例を持つので、それをもってどちらがより古体を存するかは判断できないが、この場面に關しては別本系統の「けはひ」の方がより古体を存しているように思われる（河内本はこれを撰りながら、「ども」に呼応する形で「あまた」と強調する表現を選択したものであろう）。この異同をみるかぎり、伝寂蓮法師筆「花散里」切は陽明文庫本や御物本と同じく別本系統に属すると見てよさそうである（同様の異同を持つ穂久邇文庫本にも注意を払う必要がある）。

このほかの異同で目に付くのは、次の二箇所である。

③ 170 ことゝふーかたらふ（証肖鶴日保岩徹研正）・かたろふ（為）・かたらふ（前）・ことゝふ（明）  
③ゝ④ 172 それなれとーそれなから（証麦阿天大米徹正）・それなからと（肖）・それなれと（明）・それなれと（岩）

両方に特徴的なのは、河内本系統・別本系統の主要伝本には少数の例外を除いて定家本との異同が認められないことである。「かたらふ」とある主要伝本は書陵部三条西家本・肖柏本・鶴見大学本・日大三条西本・保坂本・正徹本・大正大学本・「伝為明筆本」など傍系の定家本系統が中心であり、これに河内本系統の岩国吉川家本が加わる（鶴見本は、稿者の調査では肖柏本に近い定家本系統の一本と考える）。「それなから」とある主要伝本は書陵部三条西家本・書陵部正徹本・大正大学本・「肖柏本」などの傍系の定家本系統に麦生本・有里莫本・天理河内本・大島河内本・「岩国吉川家本」といった河内本諸本が加わるが、尾州家本・高松宮本・七毫源氏・平瀬本・飯島本などはこれを支持しない。

「かたらふ」型でもっとも古い書写本は伝為明筆本（南北朝期書写、天理図書館蔵↓池田本とは別）と見られ、岩国吉川家本も室町期以前とされるが、保坂本は室町中期の補写部分であり、ほかはそれらより下るようである。「それなから」型は大島河内本・岩国吉川家本が南北朝期であるほかは、室町期以後の書写本が占める。これらの異同は定家本系統・河内本系統の区別なく混在するように見えるが、ともに両系統の主流の位置を占める伝本を欠いており、傍系を中心とした異同であることがわかる。書承関係によつて説明できるかどうかは微妙であるが、「かたらふ」の蔓延に關しては三条西家本の存在とその影響が大きいようである。<sup>(24)</sup> 両異同とも少しく調査範囲を拡げてみると、室町末〜江戸前期頃書写の伝本の多くに認められ、見方によつてはこちらが主流の観さえあるほど流通していたことが窺える。

本文としては、「こわつくりけしきとりて御せうそきこゆ」を受けた表現であり、「ことゝふ」とあるのがふさわしいが、源氏歌「おちかへりえそしのはれぬほとゝきすほのかたらひしやとのかきねに」を受けた返歌であれば、源氏歌の「ほのかたらひし」に対して「かたらふ」と返しても、和歌的修辭としてはまったく自然であるといえる。中川の女は源氏に同調して「かたらふ」と詠むのではなく、わざと冷たく「ことゝふ」と返しているのであり、その態度が後段の「つくしのこせち」（筑紫の五節舞姫）、さらには本編の主人公である「花散里」との比較に響いてくるのであり、「かたらふ」では「らうたげ」にすぎるのであろう。たゞ、和歌の贈答という形式からは「ほのかたらひし」―「かたらふ」の呼応はあつて欲しいが、この場合、「ほのかたらひし」を受けるのは「あなおほつかな」という皮肉な表現である（「ほの」〔ちよつと〕と詠んだ源氏の言葉尻を捉えた「おぼつかな」〔どうだったかしら〕の切り返しは見事であるが、「らうたげ」でないことは言うまでもない）。こゝはそのような物語の構図的にも「ことゝふ」とあるべきであり、鎌倉期書写の古写本が系統を問わず「ことゝふ」とあることも、それを裏付けよう。

「それなれと」―「それなから」の場合はどうであろう。「ながら」では「声は昔のまゝで」の意にしかならないが、

「なれど」は前の事柄と後の事柄が対立関係にあることを示す表現であり、「声は確かに昔の声だけでも」と、次の「あなおほつかな」を更に強調する役割を担う。「なんだかはつきりとしなわ、五月雨の空の雲が低く垂れ込めているせいで、時鳥の声もよく聞こえませんで」と、源氏の久しい途絶えを恨む（きつとききほどまで忘れられていたことを自覚している）女の情念のありようは、「それなれど」でなければ収まらない（彼女は「ほのかたらひし」に和歌的修辞以上の意味付けをして、感情を硬くするような女性である）。こゝも「ながら」では柔和にすぎ、「なれど」という「らうたげ」ならざる表現が似つかわしい。さきと同様に、鎌倉期書写の古写本が系統を問わず「それなれど」とあることも肯けよう。たゞ、少し拗ねたような「それながら」の方が一般的な意味合いで女性的であることは確かであり、女性の返歌という先入観からそのような異同が生じたのかも知れないが、「中川の女」は「らうたげ」ならざる女性として造形されており、物語の表現の結構もそれに沿ったものでなければなるまい。

次に、◎を付した異同中、寂蓮切の独自異文と見える事例を中心に見て行きたい（⑤177◎「ことさら」——「ことさらに」は、定家本と大島本・明融本・横山本のみが一致する特殊な異同であり、これらの伝本の密接な関係を窺わせるが、寂蓮切の系統分類の判断材料とはならないので除外する）。

⑤178◎寂「たとひと」は、稿者が確認し得た範囲内では独自異文となっている。「ひ（飛）」は「る（累）」の誤読＝誤写から派生した異文である可能性が高いが、一旦、この異同を誤写という観点を排して検討してみたい。この「ことさらにたどると見れば」の「たどる」は「判断に苦しむ・思い迷う」の意で、「わざと判断に迷う」分らないふりをするのと見たので」といった惟光の理解を示す。「たとひ」は、(1)「譬ひ・喩ひ」で、「ものごとを他のものになぞらえる・たとえること」を示す名詞、(2)「仮令・縦」で「もし」「かりに・よしや」といった意の副詞（下に「ば」や「ども・とも」を伴うことが多い）のどちらかとなるが、どちらも『源氏物語』中に用例を求めることができる語であ

る。(1)では「南殿のおにのながしのおとゞおびやかsherたどひおぼしいでゝ」(夕顔)、「身づからこそかずにも侍らねどたえぬたとひも侍るなるは」(藤袴)といった例で、いずれも「聞いた話」類例」といった意味で用いられている。(1)の原意に近い意味で捉えると、「わざと五月雨雲の空の下で聴く曖昧な郭公の声に喩えている」||「所在がはっきりとしない||どのどなたゞか分からない振りをする」と惟光は理解したので、といった行文と解することも可能であるが、その場合「ことさらに」は「ことさらなる」とある方が自然||安定的である(このまゝでは、下に「ありける(を)」といった語が省略されている形になる)。(2)の場合は、「かゝるおい法しの身にはたとひうれへ侍りとも」(薄雲)、「たとひあらむにても」(薄雲)、「たとひまことに人なりとも」(手習)と、現代語の「たとえゞであつても」と同様の用法であり、この場合は「とりわけてもし(たとえ)」||「本当に源氏であつたとしても(いまさらどうしようもない)」といった意味と取れるが、これも下に大幅に言葉が省略されていると見なければならぬし、この場合「ことさらにたとひ」までが中川の女の言葉となるので、「とみれば」とは整合しない。すなわち、この行文で「たとひ」なる異文が成立するのは(1)の場合のみであるが、どちらにしても惟光が忖度していることに変わりはないにしても、「たどる」の方が直裁に中川の女の空とぼけている様子||態度を表しており、その女性像にふさわしい。「たどる」女が担わされている役割からしても、「ことさらに」の表現は秀逸であり、それを受けるのは曖昧さのない「たどる」||曖昧な態度を表すのであるが、わざとであることが相手にも伝わる態の逡巡でなければならぬ(まことに「ろうたげ」のなさが滲み出るような表現である)。

⑥184◎「人しれぬ」の独自異文「人しれず」はさして違いはないものゝ、「人しれぬ」は直接「心」に掛かり、「人しれず」は「思ひけり」に掛かることになる。文章効果||構文上の問題であり、どちらであつても総合的な意味に大きな違いはない。しかし、この箇所は「花散里」冒頭の一文「ひとしれぬ御こゝろづからの物おもはしきは」を受け

ており、表現的には「人しれぬ（心）」という形を動かせない。したがって、この独自異文が「花散里」の文脈の中で成立する余地はなさそうである。たゞし、「ぬ」を「す（寸）」と誤読<sub>||</sub>誤写することも難しそうであり、行文をたどってなんらかの別の理由を捜すほかなさそうであるが、本切はこゝで切断されてしまっているので、これ以上の推論は、切り取られたツレの発見を俟つかない。

以上の異同は意味的には通用する範囲のものであり、誤写によって生じた異文であったとしても排除<sub>||</sub>淘汰される種類のものかどうかは微妙であるが、現状では独立した異文として扱わざるを得ない性質の異同であることも確かである。そのほかの異同を勘案すれば、本切は陽明文庫蔵本・御物本に近親するものゝ書承関係を想定できるような寄り添うべき相手を見出しにくい本文を持つものであり、この伝叙蓮切はやはり、「花散里」巻の古本系別本（従来、池田亀鑑氏の用法を受けて「古伝本系」と呼称されるが、伝本分類上の用語としては馴染みにくく、「古本系」と呼称しておきたい）に属する新たな一伝本の断簡と結論づけられる。

さて、本切の異同中、もつとも注目されるのは、②167◎「けはひとん（して）」である。抑も、イ音便やウ音便が日常語<sub>||</sub>会話から発達したのに対して、撥音や促音は中国語<sub>||</sub>漢語を字音的に摂取した結果生じたものである以上、本来的な漢字音から離れて自由に用いられることは考えにくく、「供・共」の字音は「キョウ」なので、撥音の対象としては不適切に思える。接尾語「ども」について、それが撥音便化された「どん」の用例としては、ほかならぬ大島本の「薄雲」に「御いのりとん」（大成六二〇七／別本集成192156）と見えるが、「ん」にはミセケチ（朱）と傍書「も」（朱）が認められ、「大成」本文としては「御いのりとも」が用いられている（接尾語「ども」に限ってみても、「大成」索引では「どん」とある例は確認できない）。大島本の根幹本文（様々な修訂により定家本系統化する以前の本文）が室町期の通行本文に近いことが知られるが、これなどはそうした室町期の例としてみておくべきであろうか。相愛

大学春曙文庫蔵「宿木」残巻にも「御ことんの」（御子どももの）という例（大成一七六八11〜12／別本集成426222）が認められるが、同残巻は鎌倉中期書写にかゝるものなので、このような撥音便化は少なくともそのころまで用例が遡れることになる（同残巻は、陽明文庫本と極めて親しい関係にある古本系別本である点は注目される）。これは接尾語ではないが、同じく大島本（大成三九五2／別本集成1200220）の「須磨」にも「すみかなとん」とあり、これも「も」（朱）が傍書され、大成本文としては修訂後のものが用いられている。このほかにも、穂久邇文庫本「明石」には「とんから」（輩）なる表現（大成四四三8／別本集成統130349）が認められるが、これは鎌倉末期の用例となる。宮内庁書陵部蔵（503・36）伝二条為定筆「東屋」（大成一八四二9／別本集成5059383）には「おもへとん」なる例（接統助詞「ども」の撥音便化）が認められ、これも鎌倉後々末期の用例となるが、同本が別本に分類される伝本である点は注意されよう（国冬本「賢木」には104080「なにとんなき」と見えるが、これも別本の用例である）。

古筆切資料まで範囲を拡げてみると、『古筆学大成』第二十三巻所載の「伝西行筆源氏物語切（五）」（図版11、徳川美術館蔵『霜のふり葉』所収<sup>28</sup>）に用例が見いだせる。当該切は「匂宮」（大成一四三七1〜5／別本集成421004〜45）にあたり、当該箇所は切一行目「給へきに人とんれいのよの人には」（1003〜07）とある部分であるが、こゝは大島本・尾州家河内本・保坂本（別本集成底本）ともに「人のさまになん」とあり、「人とも」といった異同は見出せない。同「解説」には「青表紙本系統に属す」とされるが、「大成」の「青表紙本」諸本にも異同は認められず、今のところ孤立した異同とみておくほかないようである。筆跡についても<sup>29</sup>「藤原教長（一一〇九―一八〇）の真筆と推定される「伝飛鳥井雅経筆 今城切古今和歌集」（本大成第三巻所収）や一一五〇年ごろの成立と推定される「源氏物語絵巻」「蓬生」詞書（徳川美術館蔵）などの書風に酷似する。この切も同時期の書写と認定することも可能である」とされる。個々の文字（特に「は（波）」の書き癖など）からそのように判断されたものと思われるが、筆致全体を見ると、



個々の文字の大きさが均等に近く、筆線の瘦肥もなく連綿も短いなど、鎌倉後期の書風といった印象があることも否めない。書写年代については科学的調査を俟たなければ正確な結論は出ない<sup>(30)</sup>が、平安末期とも見做されるこの伝西行筆切にも同種の撥音便と見做せる可能性のある用例が見いだせることになる(たゞし本例は、その推定書写年代と関連して、「も」「ん」のいずれの用例であるかは不確定である)。手元に諸本校異を含む電子版の本文データベースがあれば更なる用例が容易に見つかるに違いないが、今は偶々気づき得た数例を上げるにとどめておきたい。

尾州家河内本の修訂者が執拗に「ん」を「も」へと削訂修正を施していたことが知られている<sup>(31)</sup>が、こうした行為からは、平安時代から地続きの書承関係の中で生じたこの「も(无)」と「ん(无)」の表記上の問題が表面化し、鎌倉中期頃には、この「ん(无)」と「も」の峻別が修訂者の頭を悩ませる問題であつたことが理解される。鎌倉期に入り、字音語から流入した撥音「ん」を表記する代用品として、それまで主に「も」に用いられていた「无」が用いられるようになり、その結果、「も」の字母としての「无」は衰退し、「无」は「ん」を表記する専用文字として定着する。しかし、物語などの書写は平安時代から地続きであり、古い写本を転写する際に「も(无)」とあつたものを他の字母に変換することなく、専用文字化した「ん(无)」と誤読し、そのまゝ書き記したために、本来撥音でないものが定着し、恰も音便化したように見えてしまうということが起こる。そのような例が蓄積すれば、それらは音便として定着するにすなわち(ことば)の正格を乱すという危惧の念のようなものが、尾州家河内本の修訂跡には見て取れる。少なくとも平安期写本との書承関係から生じた本来的でない撥音の存在が、尾州家河内本修訂者の中で意識化し問題視されていたことは事実であり、本切の例なども「も」と修訂されて然るべきものであつたに違いない。

本切の「けはひとん」もこうした一連の変動期の所産と見ておくべきであろうが、やはり接尾語「ども」の撥音便化は少しく不自然であり、本切(或いは、本切の元になつた写本の親本)の書写年代が鎌倉初期まで遡るものであれ

ば、親本に「とも(无)」とあつたものをそのように認識しつゝ、同じように「とも(无)」と書いた可能性も考えられなくはないが、⑥182「かきねも」は「も(毛)」を用いており、おそらくは「ん(无)」と認識しつゝそのまゝ書き写したものと想像される。いずれにしても、本切の元となった写本は平安期に書写された伝本に直接に繋がる親本を写したものであつた可能性が高いことは確かであろう。

## 2、東京国立博物館蔵「十三号手鑑」所収伝寂蓮筆六半切(源氏物語・明石)の確認

先述のように「古筆学大成」はツレの断簡を「本文は河内本系統」(解説)とするが、これについて確認しておきたい。先に翻刻本文を提示しておく、

ひたてまつらんとゝよみてもろこゑに  
神仏をねんしたてまつるていわうのふ  
かきみやにやしなはれたてまつり給て  
いろくゝのたのしひにをこり給しかともふか  
きうつしひにをやしまにあまねくし  
つめるともからをこそおほくうかへ給ひし  
かいまなにのむくいにかよこさまなるなみ  
風にはおほゝれ給はん天地ことわ<sup>中</sup>給へ

つみなくてつみにあたりつかさくらみをとられ  
いゑをはなれさかひをさりてあけくれや

となる。書写内容は「明石」の冒頭近くで、吹き止まない暴風雨に遭遇した源氏一行が神仏に願を懸け祈る場面である（大成四四三五～10／別本集成130327～130375）。先の架蔵切と同様に異同状況を一覽するが、「別本集成」は麦生本、「別本集成続」は陽明文庫本と底本を異にしており、こゝでは当該切の系統判別を明瞭化するために大島本（「古」）を底本とした（東博切は略号「寂」）。

① 0329 ○とよみて（古証麦阿尾御国保高〔七平大彦岩横〕米徹）・よみて（寂陽池肖日伏前研正）―ナシ（穂）・よみて（天飯）

① 0330 ○もろこゑに（古証陽阿尾池御国肖日伏保前天〔七平大彦岩横〕飯徹研正）・もろ声に（麦高）―もろこゑにをかみて（穂）・もろ心に（米）

② 0331 ～32 ◎仏神を（古証麦阿尾陽池御国肖日穗保前〔七平大彦岩横〕飯徹研正）・ほとけかみを（伏高）・ほとけ神を（天）―神仏を（寂米）

②～③ 0336 ○ふかき（古証寂陽麦阿尾池御国肖日穗保高天〔七平大彦岩横〕飯米徹研正）・ふかき（前↓／深窓ニヤシナハレテト云長恨歌ノ詞也）―ふるき（伏）

③ 0338 ◎やしなはれ（古証麦阿池国肖日伏穗保前〔横〕飯徹研正）―やしなはれたてまつり（寂尾高天）・やしなわれたてまつり（御〔七平大彦岩〕・やしなはれたてまつりて（米）

- ④ 0339 ○給<sup>レ</sup> (古寂証麦阿尾陽池国肖保前高天〔七平大彦岩横〕飯徹研正)・たまひて (御日伏穗) — ナシ (米)
- ④ 0341 ○たのしみに (古証陽麦阿尾池御国日伏穗保前高〔七平大彦横〕飯米徹研)・たのしみ<sup>上</sup> (天)・たのしひに (寂肖正) — ナシ<sup>上</sup> (岩) — 「+いろくゝのたのみしをこり給しかと」
- ④ 0342 ○をこり (古寂尾陽池国日伏穗高天〔七平大彦横〕飯)・おこり (肖保前徹研正)・ナシ<sup>上</sup> (岩) — ほこり (証麦阿御)・をはり (米)
- ④ ⑤ 0343 ◎給しかと (古証麦阿尾池御肖前天〔七平大岩〕米徹正)・給ひしかと (国保)・たまひしかと (日伏高飯研)・たまひにしかと (彦) — 給しかとも (寂陽穗)・たまひしかとも (横)
- ⑤ 0345 ◎御うつくしみ (古証麦阿池国肖日伏保前高飯徹研正) — うつしひに (寂)・うつくしみに (御天〔七平大彦岩〕)・御うつくしみに (尾穗米)・御うつくしみを (陽横)
- ⑤ 0346 ◎おほやしまに (古証陽麦阿尾池御肖日伏保高〔横〕飯米研正)・大八嶋に (徹)・おほやしまに<sup>日本ノコト也</sup> (前)・おほや<sup>上</sup> (天) — をやしまに (寂)・ほや<sup>日本</sup>しまい (御)・ナシ (穗)
- ⑤ 0347 △あまねく (古寂証陽麦阿尾池御肖日伏穗保前高〔七平大彦岩横〕飯米徹研正)・ナシ<sup>上</sup> (天) — (对照異同ナシ)
- ⑤ ⑥ 0348 ○しつめる (古寂証陽麦阿尾池御国肖日伏保前高〔七平大彦岩横〕飯米徹研正)・ナシ<sup>上</sup> (天) — しつめる (穗)
- ⑥ 0349 ○ともからをこそ (古寂証麦阿尾池御国肖日伏保高〔七平大彦岩〕飯米徹研正)・ともから<sup>上</sup>をこそ (前)・ナシ<sup>上</sup> (天) — ともからもこそ (陽横)・とんからをこそ (穗)
- ⑥ 0351 △うかへ (古寂証陽麦阿尾池御肖日伏穗前高天〔七平大彦岩横〕飯米徹研正) — うかめ (国保)

- ⑥～⑦ 0352 ○給しか (古証陽麦阿尾池国肖保前高天〔七平大彦岩横〕飯米徹正)・給ひしか(寂)・たまひしか(御日穂研)―たまへしか(伏)
- ⑦ 0353 ○いま (古寂証尾陽池御国肖日伏保前高天〔七平大彦岩横〕飯米研正)・今(麦阿徹)―いまに(穂)
- ⑦ 0355 ○むくひにか (古証陽尾池国御肖日伏穂保前高〔七平大彦岩横〕飯米徹研正)・むくいにか(寂)・むくみにか(天)―むくひに(麦阿)
- ⑦ 0356 ○いら (古証陽池国肖日伏保前飯米徹研正)―ナシ(寂尾御穂高天〔七平大彦岩横〕)・かく(麦阿)
- ⑦～⑧ 0358 ○浪風には (古麦阿〔七平大彦岩横〕)・波風には(証)・なみ風には(寂陽尾池国肖穂保天正)・浪かせには(前高)・なみかせには(御日伏)―浪風に(研)
- ⑧ 0359 ○おほれ (古寂証陽麦国肖日保前高天尾〔七平大岩横〕研正)・をほれ(飯)・おほれ(徹)・おほれ(彦)<sup>上</sup>―おほれ(米)・おほはれ(御)・おほされ(穂)・おほられ(阿七)
- ⑧ 0360 ○給はむ (古証〔七平大彦岩横〕徹)・たまわむ(御)・たまはむ(伏研)・たまはん(穂米)・給はん(寂麦阿尾陽国肖日保高天飯正)・給はんと(前)―給はむと(池)
- ⑧ 0361 △天地 (古寂証麦阿陽国穂保七平彦〔横〕飯米徹研)・天ち(尾池日高)・てん地(御肖天正)・てんち(伏大岩)―天地(前)
- ⑧ 0362 △ことほり (古証陽麦阿尾池御国肖日伏穂保前高天〔七平大彦岩横〕飯米徹研正)―ことわ□(寂)
- ⑧ 0364 ～65 ○こみなくて (古寂証麦阿尾陽池国御肖日伏保前高天〔七平大彦岩横〕飯米徹研正)―たちまちに(穂)・こみ(平)※「なへつ」以下、0522「かく&」まで落丁、以下「ナシ(平)」は省略)
- ⑧ 0367 ○あたり (古寂証尾陽麦阿池国御肖日伏保前高天〔七平大彦岩横〕飯米徹研正)―あたりて(穂)

- ⑨ 0368 ～ 69 ○つかさ位を (古麦阿前「七大彦岩横」)・つかさくらみを (寂尾陽池国御肖日穗保高天飯米徹研正)・つかさくらひを (伏)・宮くらみを (証) — 官さくを (穗)
- ⑨ 0370 ○とられ (古寂証麦阿尾池国御肖日伏穗保前高天「七大彦岩横」飯米徹研正) — さりてあけくれ (陽)
- ⑩ 0371 ～ 73 ○家をはなれさかひを (古「七大彦岩横」米徹)・いゑをはなれさかみを (尾陽池御肖日伏飯研)・いゑをはなれさかひを (寂国保天)・いへをはなれさかひを (高正)・家をはなれさかひを (前)・家をはなれさかひを (証) — 家を (麦阿)・宮をはなれさかひを (穗)

「明石」については「大成」も「別本」の項目を立てず、「別本集成」底本の麦生本や対校本の阿里莫本も「青表紙本」に分類される伝本であり、別本に分類される伝本は確認されていない (古筆切では、伝顕昭筆六半切二葉と伝西行筆四半切三葉が知られる)。

表中、⑥六例の内、③ 0338 ④「やしなはれたてまつり (定家本「やしなはれ」)・⑤ 0345 ⑥「うつしひに「うつくしみに」 (定家本「御うつくしみに」)・⑦ 0356 ⑧「ナシ (定家本「くら」)」の三例は、少しの例外は含むものゝ河内本系統に特徴的な本文との一致が認められる。○を付した異同でも「寂」はすべて河内本系統の諸本 (尾御高天七平大彦岩) と同居するので、東博切を河内本系統と見做すことに異論はない。ただし、他の三例の内、⑤ 0346 ⑥「をやしまに」 (諸本「おほやしまに」) はおそらく脱字ではあろうが独自異文となっており、② 0331 ～ 32 ③「神仏を」 (諸本「仏神を」) は米議會本と一致するのみ、④ ～ ⑤ 0343 ④「給しかとも」 (諸本「給しかと」) も、「も」の一字とはいえ陽明文庫本・穂久邇文庫と東博切のみが諸本と対立する本文となっている。このような小異がなければ、東博切は河内本系統と完全に一致し、その書写年代も河内本の成立した鎌倉中期以降と考えて当然である。これらの小異

を過大評価して、本切を河内本成立以前の、河内本校訂に利用された古本系統の本文を持つ伝本の断簡とすることもできようが、それにしては河内本との一致が目立ちすぎる。抑も、校訂本文である河内本の元になった伝本といった推定には無理があり（河内本は本文の取捨選択を中心とした校訂本文というよりは、複合本文的傾向が強く、そういった本文の元になった本文<sup>(35)</sup>河内本作成時の底本や校合本は、現存する河内本とイコールの関係で結ばれることは却って少ないはずである）、東博切はやはり河内本系統の一伝本の断簡とし、河内本の成立に期を接した鎌倉中期頃のいち早い書写本と見ておくべきであろう。

「花散里」と「明石」では本文系統が明らかに違っており、成立後間もない河内本の影響を受けた巻を持ちながら、一方でまったく違う系統の写本も交えているという状況からは、伝寂蓮切の元となった『源氏物語』が五十四帖を一纏めにして伝来したものを書写したのではなく、偶々入手し得た巻々を書き写しながら徐々に纏められたものである可能性も浮かび上がるが、手元の五十四帖中に生じていた欠巻を間近に成立した河内本で補ったと考える方が現実的であろう（筆者を同じくする、それ〴〵に独立した五十四帖が存在した可能性もあるが、かなり縦長の六半形冊子本という特殊な形状からは、やはり同一の五十四帖に属するものと考えた方がわかり易い）。いずれにしても、鎌倉中期まで遡る『源氏物語』の本文は貴重であり、殊に「花散里」切は新たな古本系別本の存在を示すものである。両者は「花散里」と「明石」という近接する巻であるが、同一筆跡の別の巻であることから、全巻一筆の『源氏物語』五十四帖が完備していた可能性も考えられる（各人が巻を分けて担当した分筆<sup>(36)</sup>寄合書きの可能性もあるが、その場合でも、両切から推測される特殊な判型が搜索の手懸かりとなる）。更なるツレの発見を期したい。

〔注〕

- (1) 小松茂美『古筆学大成』第二十三卷「物語 物語注釈一」(講談社、平成四 1992年六月)。
- (2) 小松茂美『古筆学大成』第十九卷「私家集 三」(講談社、平成四 1992年六月) 所収の「伝西行筆林葉和歌集切」 図 312 ～ 316 「解題」参照。
- (3) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第三卷「葵々須磨」(桜楓社、平成二 1990年十月)、同『源氏物語別本集成統』第三卷「葵々須磨」(おうふう、平成十八 2006年九月) に依る。
- (4) 池田龜鑑編著『源氏物語大成』第二冊・校異篇(中央公論社、昭和五十九 1984年十一月普及版初版) に依る。
- (5) 同箇所に関しては、三谷邦明「花散里の方法——伊勢物語六十段の扱い方を中心に——」、『中古文学』第15号、昭和五十 1975年五月)、西木忠一「花散里卷私論」、『樟蔭国文学』第29号、平成四 1992年三月)、徳岡涼「花散里卷の中川女宿の垣根より」、『国文研究』第51号、平成十八 2006年三月)、鈴木日出男「花散里の歌」、『成蹊國文』第45号、平成二十四 2012年三月) などの興味深い論考の蓄積がある。
- (6) 前田家育徳會尊経閣文庫編『書表紙本原本 源氏物語 花ちるさと／かしは木 二帖』(原装影印古典籍複製叢刊、雄松堂書店、昭和五十三 1978年十一月) に依る。
- (7) 加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』(風間書房、平成十三 2001年二月)。
- (8) 東海大学蔵桃園文庫影印叢書第一卷『源氏物語(明融本) I』(東海大学出版会、平成二 1990年六月) 所収の影印に依る。「大成」の略号「明」(天理図書館蔵伝二文条為明筆本) は「別本集成統」の「為」にしたがい、本稿では明融本を「明」とする。
- (9) 「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」に公開される画像に依る (<https://shoryobu.kunaicho.go.jp/>)。略号は、大阪大学文学部加藤洋介研究室編「源氏物語校異集成(稿)」(以下、「校異集成稿」と略記) → [https://www2.kansai-u.ac.jp/ok\\_matsu/index.html](https://www2.kansai-u.ac.jp/ok_matsu/index.html)) の「証」にしたがう。
- (10) 池田和臣編『飯島本源氏物語』第二卷(笠間書院、平成二十一 2009年一月) に依る。「解説」には「飯島本花散里卷はほぼ河



内本と一致している」とある。

- (11) 国立国語研究所ウェブサイト公開される「米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文」に依る (<https://mmstrv.ninjal.ac.jp/Lcgenji/>)。菅原郁子『源氏物語の伝来と享受の研究』(武蔵野書院、平成二十八(2016)年二月) 第二篇「室町期における『源氏物語』本文の伝来と享受」第五章「米国議会図書館蔵『源氏物語』の本文——麗子本対校五辻諸仲筆本の出現——」参照。

- (12) 上記二本は、国文学研究資料館「国書データベース」に公開される画像に依る (<https://kokusho.nijl.ac.jp/>)。両本については、

菅原郁子前掲書(注11) 第二篇第一章「伝正徹筆『源氏物語』の伝来と奥書」第二章「正徹本の本文——国文研本・京都女子大本・慶應大本・書陵部本を中心に」参照。書陵部本は「校異集成稿」の略号「徹」にしたがい、国文研本は「研」とした。

- (13) 大正大学附属図書館「OHDA I デジタルアーカイブス」に公開される画像に依る (<https://mapps.ne.jp/fais/index.html>)。同本については、上野英子「大正大学蔵『源氏物語』について」『源氏物語研究』第7号(翰林書房、2002年四月) 参照。「花散里」については「一部に河内本系本文が流入」とある。

- (14) 諸本の略号と略称は以下の通り(「大成」「河内本集成」略号「宮」は、「別本集成統」の「高」にしたがった。「尾」「御」は「河内本集成」「別本集成」に共通するが、校異本文の掲出には「別本集成」を用いた。

寂 伝寂蓮筆六半切(架蔵)

定 定家本(尊経閣文庫蔵)

明 明融本(東海大学図書館桃園文庫蔵)

証 書陵部三条西家本(宮内庁書陵部蔵)

飯 飯島本(春敬記念書道文庫蔵)

米 米議会本(米国議会図書館蔵)

徹 書陵部正徹本(宮内庁書陵部蔵)

研 国文研正徹本(国文学研究資料館蔵)

- 正 大正大学本（大正大学図書館蔵）  
〔以下、「別本集成」に依る〕
- 古 大島本（古代学協会蔵）  
陽 陽明文庫本（陽明文庫蔵）  
御 御物本（東山御文庫蔵）  
麦 麦生本（天理図書館蔵）  
阿 阿里莫本（天理図書館蔵）  
尾 尾州家河内本（名古屋市蓬左文庫蔵）
- 〔以下、「別本集成」に依る〕
- 国 国冬本（天理図書館蔵）  
肖 肖柏本（天理図書館蔵）  
為 伝為明筆本（天理図書館蔵）  
鶴 鶴見大学本（鶴見大学図書館蔵）  
日 日大三条西本（日本大学蔵）  
伏 伏見天皇本（古典文庫）  
穂 穂久邇文庫本（穂久邇文庫蔵）  
保 保坂本（東京国立博物館蔵）  
前 前田家言経本（尊経閣文庫蔵）  
高 高松宮本（国立歴史民俗博物館蔵）  
天 天理河内本（天理図書館蔵）

〔以下、「河内本集成」に依る〕

七 七毫源氏（東山御文庫蔵）

平 平瀬本（文化庁蔵）

大 大島河内本（中京大学図書館蔵）

鳳 鳳来寺本（愛知県新城市鳳来寺蔵）

兼 一条兼良奥書本（天理図書館蔵・宮内庁書陵部蔵）

岩 岩国吉川家本（吉川史料館蔵）

〔以下、「大成」に依る〕

横 横山本（横山敬次郎氏蔵↓所在不明）

〔15〕 使用する校異符号は以下の通り（合点「 $\sphericalangle$ 」については「別本集成」に倣い「 $\parallel$ 」を付さない）。

Ⅱ（傍書） +（補入・記号あり） ±（補入・記号なし） \$（ミセケチ） &（なぞり） △（不明） ー（改行）

〔16〕 岡寫偉久子『源氏物語写本の書誌学的研究』（おうふう、平成二十二年四月）第二章「麦生本源氏物語」第二節「麦生本と阿里莫本」参照。

〔17〕 鶴見大学図書館蔵本「花散里」については別稿を用意しており、『中京大学文学会論叢』第10号（令和六年三月刊行予定）に掲載予定。

〔18〕 久曾昇昇編『源氏物語断簡集成』（汲古書院、平成十二年十二月）は第五七回「伝後伏見天皇宸翰源氏物語（甲）」を（異系統本）とするが、小林強「源氏物語関係古筆切資料集成稿」（伊井春樹編『本文研究 考証・情報・資料』第六集（和泉書院、平成十六年五月）↓以下、「古筆切集成稿」と略記）が「源氏物語梗概本類古筆切一覽稿」に（本文簡略化型）として分類するように梗概本である。中葉芳子「鎌倉期における『源氏物語』梗概化の方法——古筆切を手がかりに——」（『國文学』95号、平成二十三年二月）参照。

- (19) 本稿では、「青表紙本」「青表紙本系統」といった呼称は引用文を除いて用いず、「定家本」「定家本系統」という表現を用いる。「定家本」は定家自筆本・定家監督本を指す。「河内本系統」に対する「非河内本系統」の内の一系統という認識であるが、その場合「別本」という分類に含まれることになるので、紛らわしさを避けるために「非河内本系統」・「非定家本系統」の諸本を「別本」と呼称し、これと区別しておく（研究の進捗により、いずれは定家本系統を含めて「くく系別本」というように別本内での系統分類〔古本系・非古本系・定家本系等〕がなされるであろうが、それまでの臨時的措置である）。これについては、新美哲彦『源氏物語の受容と生成』（武蔵野書院、平成二十二年九月）第一部『源氏物語』本文系統の再構築」第一章「揺らぐ「青表紙本／青表紙本系」に冷静な提言がある。
- (20) 各所蔵機関所収の資料の調査範囲は、成稿時点（令和五〇二〇三年九月末日現在）に「国書データベース」を始めとして各所蔵諸機関がインターネット上で画像を公開するものに限ったので、閲覧許可申請の必要な資料については含まれない。校合本に揭げた伝本（注〔14〕参照）を除き、利用諸機関についての一々の注記は、煩を避けて省略した。
- (21) 岡嶋偉久子「源氏物語肖柏本——その書誌的概要と考察——」（『藝文研究』Vol. 113・No. 1「田坂憲二教授退任記念論文集」、平成二十九年十二月）に依る。
- (22) 肖柏本は「巻ごとに本文の性格を異に」するが、多くの巻（吉岡氏が対象とされた「八帖中五帖」）で「河内本と接触したことがほぼ確実な」「校訂本文的性格」を有する伝本とされる（吉岡曠『源氏物語の本文批判』（笠間叢書274、笠間書院、平成六二〇〇四年六月）第四章「青表紙本諸本の性格」二「肖柏本・三条西家本」参照）。
- (23) 天理図書館編輯・天理圖書館叢書第二十五輯『天理圖書館稀書目録 和漢書之部 第三』（天理大學出版部、昭和三十五年1960年十月）二三四五「源氏物語花散里巻 寫一冊」に依る。
- (24) 「かたらふ」型には、日大三条西家本・書陵部三条西家本をはじめとして、熊本大学附属図書館永青文庫蔵（56・赤・203）本・京都大学附属図書館蔵平松家本〔第七門・ケ・4〕・同平松家本〔第七門・ケ・5〕・同中院文庫蔵〔中院・V・20〕本・早稲田大学図書館蔵〔く〇2・04867・0051〕実枝筆本などの三条西家本系統の諸本が認められる。「三条西家の家本として後世に大

きな影響をおよぼした三条西家本が実質的には肖柏所持本であった」ことが指摘されており（前掲書〔注（22）〕第四章三、三条西家本の書写過程と性格）、当然その「校訂本文的性格」も受け継いでいることになる（こゝにいう三条西家本は、日大三条西家本を指し、肖柏所持本は現存の天理図書館蔵肖柏本とは必ずしもイコールではない）。「それながら」型を含めて、伊藤鉄也「別本について」（鈴木一雄監修、秋山虔・室伏信助編集『源氏物語の鑑賞と基礎知識⑨花散里』（国文学「解釈と鑑賞」別冊、至文堂、平成十五、2003年六月）所収）に考察がある。なお、三条西家本の成立の経緯については、上野英子『源氏物語三条西家本の世界——室町時代享受史の一樣相』（武蔵野書院、令和元、2019年十月）に詳しい。

(25) 池田龜鑑編著『源氏物語大成』第八冊・索引篇（中央公論社、昭和六十、1985年五月普及版初版）に依る。

(26) 新美哲彦「大島本『源氏物語』と東海大学蔵伝明融筆『源氏物語』の比較から見えるもの」（中古文学会関西西部会編『源氏物語本文研究の可能性』（和泉書院、令和二、2020年三月）所収）参照。

(27) 本用例は、池田龜鑑編『源氏物語大成』第一冊・校異篇（中央公論社、昭和五十九、1984年十月普及版初版）の「校異源氏物語凡例」一七頁に掲げる。

(28) 前掲注（1）。「料紙は鳥の子。紙の寸法は、たて一八・〇センチメートル、よこ一四・五センチメートル。別家三代古筆了仲（二六五七—一七三六）の極札」（同解説）を付す。一面十行（一行分程度切取があるか）。これも本切と同様に、元は六半形としてはかなり縦長の特殊な判型の冊子本であったと推定される。なお、徳川黎明會叢書・古筆手鑑篇二『蓬左・霜のふり葉・八雲』（思文閣出版、昭和六十一、1986年二月）「表三三—62 西行法師 源氏物語切」参照。

(29) 「校異集成稿」に「定家本（青表紙本）」「別本」として掲げられる諸本にも異同は認められない。このほか、1022「きこえうちいてなと」（定家本諸本〔以下、「定」〕「きこえうちなと」↓別本系〔以下、「別」〕「こち（うち）いてなと」）、1030「あたりをは」（定「わたりをは」↓別「あたりをは」）、1042「おもほす」（諸本「おほす」といった異同状況からは、この伝西行筆切は別本と見做すのが適当と判断される。「解説」には「定家の青表紙本成立以前の一伝本の面目を伝えるもの」との文言が刻まれるが、これは正に別本の謂いである。

(30) 前掲注(1)に「伝西行筆源氏物語切(一)」と分類され、鎌倉初期書写とされる一群の古筆切については、炭素14年代測定法によって「誤差範囲の上限が一三〇〇年、下限が一四〇九年」「鎌倉末期から南北朝期」との測定結果が報告されている(池田和臣『源氏物語生々流転 論考と資料』〔武蔵野書院、令和二〇20年三月〕VII『源氏物語』関係古筆切資料」23「本文関係の古筆切資料」二「別本」⑨「伝西行筆塙正切(宿木巻)」。

(31) 岡嶋偉久子前掲書(注(16))第一篇「源氏物語の鎌倉写本」第二章「尾州家旧蔵河内本源氏物語」第二節「鎌倉期本文の成立」四「本文修正・改訂」削訂・補入・見せ消ち」二「削訂修正について」参照。

(32) 源氏物語別本集成刊行会編『源氏物語別本集成』第四卷「明石く絵合」(桜楓社、平成三1991年一月)、同『別本集成続』第四卷「明石く絵合」(おうふう、平成十九2007年六月)、「河内本集成」、「大成」(注(4))に依る。注(14)諸本中、明融本(明)、鶴見大学本(鶴)・伝為明筆本(為)・鳳来寺本(鳳)・伝一条兼良奥書本(兼)が抜け、池田本・彦根本の二本が加わる。飯島本は池田和臣編『飯島本源氏物語』第三卷(笠間書院、平成二十一2009年一月)に依る。「解説」には「定家本と見ておく」とある。

寂 東博切(東京国立博物館蔵「十三号手鑑」所収)

池 池田本(天理図書館蔵)

彦 伝藤原為家筆本(彦根城博物館蔵)↓彦根本

(33) 前掲注(16)に同じ。

(34) 高田信敬「断簡——小さな窓から眺めた『源氏物語』——」〔『源氏物語の鑑賞と基礎知識』⑨花散里〕〔前掲注(24)〕所収)には「56明石巻断簡(戊)」「極札ナシ・鎌倉後期写」「57明石巻断簡(己)」「極札ナシ・南北朝写」の二葉について「現存いずれの伝本とも重ならないこの切を別本と認定してよいかどうか、なお慎重に考えたいが、少なくとも鎌倉時代の本文に、河内本・青表紙本とは別の形があったことの一証にはなる」(戊)、「もし「明石」巻に別本ありとせば、この断簡を有力候補の一つに挙げてよからう」(己)とするが、言われる通りなお慎重な検討が必要であろう。戊切のツレとして、かうなや目録『拾遺鶏肋』

3号(5)が報告されており、これによって「伝頭昭」とされたものであるが、未見(古筆切集成稿)・「頭昭」項、己切は「伝称筆者不明」項。田中登・横井孝編『源氏物語 古筆の世界』(武蔵野書院、令和五2023年十一月)には、先の己切が224「西行」(不明) 四半切(明石)①として掲載されるほか、ツレとして<sup>225</sup>「西行 四半切(明石)②」・226「西行 四半切(明石)③」が掲げられており、②解説(横井孝執筆)には「別本の本文と認めてよかるうか」とある。

(35) 加藤洋介「角屋保存会蔵 源氏物語未摘花巻―解題と影印・翻刻―」『角屋研究』第18号、平成二十一2009年二月)には、「未摘花」本文について「河内本の成立に関わって、陽明文庫本・角屋本に近い本文を底本とし、そこに定家本その他の本文による校合が加わったのが河内本なのではないか」との見通しが示されている。

【付記】 本稿は、京都女子大学における国文学特殊講義「中世古筆切研究」(令和五2023年度後期) 第6回講義「鎌倉期書写の源氏物語切(二)——伝寂蓮法師筆切二種——」(十月十九日実施)のオンライン版テキストの一部を元に、して成稿したものです。資料の探索等についてお世話になった京都女子大学図書館アクティブラーニングコモンスズに、記して感謝致します。

(本学文学部国文学科非常勤講師)